

「全鍍連」 2018年 11月号 理事長のよこがお

富山県工業組合 理事長 園 晶雄 (立山電化工業(株) 代表取締役社長)

「わたしの30年の歩み」



富山県鍍金工業組合の理事長を務めております園晶雄と申します。私は立山電化工業の代表を30年余り務めてきましたが、その歩みをお話ししたいと思います。

私の父、園直龍が終戦後に富山県高岡市に引き上げ、昭和20年に北陸鍍金工業所というめっき会社を始めました。創業時は主にクロムめっきを行っていたようです。細々ながら少しずつ仕事を増やし、創業9年後に立山電化工業株式会社に社名を変更しました。前途洋々かと思われましたが、昭和37年には工場4棟を全焼するという一大事がありました。当時私は6歳でしたが、火災現場のこげた臭いを今でも強く記憶しています。この火災で当時の従業員は「もう終わった」と思ったようですが、創業者は諦めることなく銀行やお客様を駆け回り、8ヶ月後に以前と変わりなく姿で事業再開に漕ぎつけました。苦労の甲斐があり、お客様にも恵まれ徐々に業容を拡大させることができました。

昭和61年に創業者が体調を崩し、半年後に急逝してしまいました。当時31歳の私は心の準備も整わないまま、社長という重いバトンを受けることになりました。もちろん戸惑いも不安もありましたが、やるしかありません。残された従業員とともに創業者の精神を受け継ぎ、質実剛健、質素儉約、信義に従い誠実に企業運営を行おうと考えていました。当時、富山県内では電子部品向けの精密プレスや半導体製造を行う会社が増え、めっき需要も増え、こちらから顧客を積極開拓するというよりも、お客様や取引先がお客様を紹介して下さることが多く、今の仕事を誠実に対応することで仕事を頂けるという感覚でした。チップ抵抗器、コネクタピン、半導体フレーム、フープ端子など、富山県内外のお客様から仕事を頂くようになりました。平成3年には抵抗器のめっき増産に対応するため富山県射水市に新工場を建築しました。お客様の成長に伴い当社の仕事も徐々に増えてまいりました。

しかしながら、いつも順風が続くわけではありません。2001年ITバブルの崩壊、2008年リーマンショック、市場変化に伴い受注品の急激減産など、振り返れば苦境も何度もありました。しかし、創業者から築いてきた経営基盤があったため、従業員を解雇することなく堪え忍ぶことができました。会社の原動力である人を維持できたことで、次に向けて立ち直ることができたと感じています。

近年は、スマホ向けコネクタ、自動車向け抵抗器の仕事が増えています。自動車関連のお客様からは「人命に関わる」という重い言葉をいただき、身の引き締まる思いです。大きい仕事は魅力的な反面、品質や納期の責任も大きくなることを、

自分にも社員にも言い聞かせています。最近は環境変化のスピードも、お客様が求めるスピードも速くなっており、創業者の「現状維持は衰退である」という言葉を改めて胸に刻んでいます。

とりとめのない話ではありますが、何かご参考になれば幸いです。